

6月9日(月)の朝、延岡に別れを告げました。何から何まで親切にしてください、お礼の言葉も十分に述べられないほどです。今度はいつお会いできるでしょうか。上りの特急は速くて、小倉で新幹線に乗り換えて、広島には昼過ぎに到着しました。毎年、8月6日の原爆忌には8時15分のテレビの映像に合わせて、共に平和を祈念して来ましたが、実際に訪れるのは今回が初めてでした。妹の神学校の先輩の広島観音町教会の盛谷牧師が案内してくださいました。

私どもは盛谷牧師の車で、川を渡り、広い道が延び、路面電車がスイスイ走る広島市内を通り抜けて、まず、市の西部にある広島観音町教会を訪問しました。住宅地の一角にありました。今年の2月に新会堂を献堂したばかりです。広い敷地で、駐車場も備えた、美しい教会です。玄関には緩やかなスロープが備えられ、一階の玄関ホールに入ると、階段が広々として、事務室、厨房、トイレなど整っていました。広い階段があるのに、エレベーターもあって、楽々と二階の礼拝堂に上がることが出来ました。車椅子を利用する日が来ることを自然なものと受け止めてエレベーターを設置したのです。礼拝堂は明るく、広く、講壇は間接照明で優しく照らされています。正面のステンドグラスは、輝くキリストの、愛の心を示す深紅の円を持つ十字架を中心に、左右に大空、雲、虹、波、風を感じるシンボリックなイメージの三つの円が重なった窓です。装飾はそれだけで、簡素で、柔らかい、落ち着いた空間です。何よりも、この教会堂はバリアフリーが徹底されていました。



この教会堂はバリアフリーが徹底されていました。



盛谷牧師から小さい冊子「手鏡」をいただきました。これは昨年6月に亡くなられた夫人の句集でした。ですからお訪ねしたのはちょうど一年忌に当たりました。夫人は2歳の時、広島南段原(爆心地より2キロ位の距離)で母上におんぶされて被爆されました。母上の左右の手を姉上たちが握っていたとのこと。3姉妹はいずれも間質性肺炎と言う難病で、70歳頃に亡くなっています。これは原爆に関連している後遺症の一つではないかと思うのですが、広島市は原爆を受けた人の死因をいちいちチェックしていないとのこと。これでは原爆の被害の実態を知るの難しいと思われました。長年の、呼吸困難を引き起こす咳との闘い、姉上たちの死、迫りくる死の予感の中で、夫人は最晩年の1年間、突然俳句を読み始められたそうです。

元旦の空映さむと鏡拭く  
背負われて業火のヒロシマ逃げしてふ  
大根を切る音豪快厨夫

温き日の病む身清拭待ち侘ふる  
手鏡にいつしか映る縹雲  
夫の手に縋りし日々や除夜の鐘

盛谷牧師は「妻は死の10日前、病院に入院し、火が消えるように、汐が引くように静かに天に召された。わたしは、ただ啞然として立ちつくす以外なかった」とあとがきに書いておられます。この喪失感には誰にも慰めえない悲しみです。けれども盛谷牧師は人懐こい笑みをいつもたたえて、積極的に生きておられます。いただいた教会の週報の最後に奇跡物語の主人公を、「癒された彼もいつの日か終わりの日を迎えるでしょう。しかし、彼は神を知った者、神を信ずる者として終わりの日を迎えるでしょう。それが『救われる』ということですよ」と書いておられます。